

資料

大学生の就職に対するイメージの構造

杉本 英 晴*

問題と目的

- ① 近年、いわゆる「フリーター」の急激な増加にみられるように就業不安定な若者の存在が社会的関心を集めている。こうした就業不安定さは、これまで無縁とされてきた大学卒業者においても顕著な傾向として表れている。実際、「学校基本調査」によれば、1970年以降70%から80%で推移していた大学卒業者の就職率¹は、1991年の81.3%を頂点として減少し、2000年からの5年間は60%を下回るなど、1995年から2010年現在に至るまで一度も70%にまで達しないという状況である。こうした大学生の就業不安定さについて検討する上で、**大学生の進路選択過程を理解することは非常に重要な課題だといえる**。そのため、大学生の進路選択過程についてのより詳細な検討、および、それらの結果をもとにした大学におけるキャリア教育・支援のさらなる拡充が求められている。
- ② これまでの進路選択研究では、学校から社会への移行の際、大学生の進路選択にさまざまな要因が影響することが実証されてきた。中でも、“働くこと”に対する価値観は進路選択に影響を及ぼす主要な要因の1つとしてあげられる。たとえば、“勤労観”や“職業観”、“労働観”など、広く理論展開、実証研究が行われてきている（江口・戸梶, 2009；柿原, 1997；三川, 1991；森永, 1994, 1997；岡本, 1972）。文部科学省（2004）も、“キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書”を提出したが、副題には“児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために”

とあるように、“働くこと”に対する価値観は、現在の進路選択研究の主要なテーマとされてきたといえよう。

- ③ **ところが**、近年になって、これまでの“働くこと”に対する既存の価値観から大学生の進路選択を捉えることは困難であるという指摘がなされている。三宅・遠藤（2005）は、大学生の進路選択に関する実証研究から、彼らが「働くことの意味」に関するアノミー（価値観の混沌）の中に置かれていることを示唆し、既存の価値観で大人側が学生側に接することの効果のなさを危惧している。
- ④ そもそも価値観は、欲求に関する認知表象であり、行動の基準を提供し、人を望ましい最終状態に向かわせ（Rokeach, 1973）、目標設定のための基礎を形成し、また興味よりも内在化された構成概念（Brown & Crace, 1996）であるとの定義がなされる。進路選択場面で考えるならば、価値観は、進路選択に取り組む、あるいは、進路を決定するといった「望ましい状態」に向かわせるものといえるだろう。すなわち、“働くこと”に対する価値観を取り上げるとき、そこにはすでに、“働くこと”が重要であるといった既存の社会がもつ「望ましさ」が前提とされる。実際、これまでの“働くこと”に対する価値観の研究を概観すると、多くの研究で「望ましさ」という方向性を含んだ価値観が取り上げられてきた（Super, 1970；Super & Nevill, 1986）。
- ⑤ **しかし**、進路選択のあり様が多様化している昨今、既存の社会が持つ「望ましさ」については再考する必要があるだろう。たとえ研究者の視点から「望ましくない」と思われるような認知や行動であっても、進路選択を行う当事者にとっては、また当事者のキャリア発達にとっては意味のある重要なものであるかもしれない。それにもかかわらず、進路選択研究においてこうした当事者側からの検討がほとんど行われていない。そのため、“働くこと”に対する既存の価値観のように、「望ましさ」を前提とした価値観を研究者側が提供し

* 所属……中部大学人文学部

(2009年10月28日受稿, 2012年4月20日受理)

連絡先: 487-8501 愛知県春日井市松本町1200

中部大学人文学部

sugimotoh@isc.chubu.ac.jp

て検討するのではなく、実際に現代大学生が“働くこと”をどのように捉えているのか、既存の価値観を提供することなく当事者である学生自身から抽出し検討する必要があるだろう。

⑥ そこで本研究では、「望ましき」の方向性を前提とせず、進路選択に影響を及ぼす要因として、“働くこと”に対するイメージを取り上げる。イメージは、概念のように抽象的で恒常的なものではなく、具体的あるいは一時的なものであり（岩熊・楨田, 1991）、感情や価値、要求、信念が結合したもので、価値判断を含み、目的的行動を直感的に導く働きを有しているとされる（Elbaz, 1981）。実証研究では、授業イメージ（秋田, 1996）、教師や子どものイメージ（三島, 2007）など特定のグループやコミュニティで共有される具体的なイメージが捉えられてきた。これらの研究では、既存の「望ましき」を前提とせず、当事者の視点を強調した検討がなされている。そこで、本研究で注目する“働くこと”に対するイメージも、大学生から抽出することにより、既存の社会のもつ「望ましき」とは異なる側面を含んだ大学生独自の“働くこと”のイメージを明らかにできるものと思われる。また、イメージは目的的行動を導くことから、“働くこと”に対するイメージについて検討することは、どのようなイメージが進路を選択させ、行動、さらには決定を導くのか、といった進路選択過程への影響可能性を検討することにもつながるものと思われる。

⑦ ところで、高橋（2005）によれば、特に1950年から1960年代の高度経済成長期以降、第2次産業、第3次産業の成長により、“働くこと”は“就職すること”、つまり“会社に入ること”となっていったとされる。学校から社会への移行がスムーズであり、終身雇用制が確立していた頃には、学校を卒業してすぐ会社に就職し、正規雇用者として働く者が多かった。そのため、移行の際に重要なことはどのような職種を選択するかという「職業選択」が重要であった。

⑧ しかし、学校から社会への移行がスムーズではなくなり、就職せずとも働くことのできる非正規雇用の労働環境が備わりつつある。そうした現状において、いわゆる「フリーター」など会社に就職せずに働くという選択をする若者も多い。すなわち、高度経済成長期以降、ほぼ同義であった“働くこと”と“就職すること”は等しい意味を持たなくなり、会社に就職して正規雇用者として働くか、就職しないで非正規雇用者として働くかという新たな選択肢があらわれてきたと考えられ

る。これらのことを勘案し、本研究では“働くこと”に対するイメージを取り上げるが、“働くこと”よりも狭義の“就職すること”に注目した検討を行うこととする。

⑨ 以上より、本研究では、就職することに対するイメージ（以下、就職イメージ）について検討する。具体的には、研究1において、大学生がどのような就職イメージを有しているのかについて探索的に検討し、その内容を明らかにする。その上で、研究2では、研究1で示された就職イメージの具体的な内容から、就職イメージに関する項目化を行った上で就職イメージ尺度を作成し、進路選択過程に影響を及ぼす職業レディネスや職業選択課題認知との関連性を検討することで、就職イメージの構造を明らかにすることを目的とした。

研究1

目的

研究1では、大学生がどのような就職イメージを有しているのかを探索的に検討する。なお、本研究では、大学生独自の視点を検討するため、大学生から自由記述回答を収集するが、同時に、既に就業している社会人からも自由記述回答を収集し、記述数（量）や記述内容（質）の観点から社会人の就職イメージと比較することによって、大学生における就職イメージの特徴を明らかにしていくことを目的とする。

方法

調査対象者 調査対象者は首都圏の3大学の文系学部在籍する大学生53名（男性28名、女性25名）と就業期間5年以下の社会人19名（男性10名、女性9名）の合計72名であった。平均年齢は、大学生が21.00歳（ $SD=1.46$ ）、社会人が24.39歳（ $SD=2.06$ ）であった。

調査時期 本調査は、2004年7月に行われた。

調査内容 就職イメージを検討するため、秋田（1996）を参考に“今の自分にとって、就職することとはどのようなことですか？ また、就職に対してどのようなイメージを抱いていますか？”という教示に自由記述形式で回答を求めた。

結果

就職イメージの自由記述回答を同じ意味内容で分類するにあたり、はじめに、本調査で得られた各対象者の自由記述回答を、一つずつの意味内容

に分割した。その結果、全体で平均5.47 ($SD=2.83$) の記述がみられた。

次に、記述数に対する性と就業の有無による差を検討するため、従属変数を記述数、独立変数を性(男性、女性)×就業の有無(大学生、社会人)の2要因分散分析を行った。その結果、交互作用はみられず、就業の有無にのみ主効果がみられ($F(1, 68)=7.39, p<.01$)、大学生よりも社会人において就職イメージに対する記述数が多くみられた(大学生： $M=4.94$ ($SD=2.72$)、社会人： $M=6.95$ ($SD=2.68$))。

さらに、分割された回答を意味内容で分類するため、KJ法による検討を行った。なお、KJ法は大学生の視点から検討すべく、就職や就職活動をしたことのない心理学専攻の大学院生3名と大学生2名により検討された。その際に、意味が重複していないか、複数の解釈可能性がないか、意味を理解しにくい項目がないか、抽象的な項目がないかという検討がなされた。

その結果、最終的に30の意味内容に分類され、大学生と社会人の相違が確認された(Table 1)。なお、項目の名称は出現率の多い表現や出現した項目を統合した表現を用いた。

- α 大学生の回答率が最も高かった就職イメージは“お金を稼ぐということ”であり、順に“時間が縛られるということ”“自立するということ”“社会的な地位を確立すること”“社会的な責任”で回答数が高く、これらの就職イメージは3割以上の大学生から確認された。これらのイメージのうち、“お金を稼ぐということ”“時間が縛られるということ”“社会的な責任”は社会人においても40%以上の回答率を示したが、“自立するということ”“社会的な地位を確立すること”は15%程度にとどまり、これらは大学生において相対的に想起されやすいイメージだといえる。その他、社会人において最も回答率が高かったイメージは“生きていくために必要なこと”であり、“自分を成長させるもの”“人との出会い”“夢の実現につながる”“さまざまなことが経験できる場”“社会の流れに流されているということ”“精神的な安定を得られるもの”は、3割以上の社会人から確認され、これらは社会人において相対的に想起されやすいイメージだといえる。

他方、全30項目のうち大学生のみあるいは社会人のみが回答した項目は11項目確認され、“自分の可能性をせばめること”“社会のシステムの一部に組み込まれてしまうこと”“当然のこと”“夢をあきらめること”“面倒なこと”“家族への恩

返し”は学生にのみ、“人との出会い”“健康管理が難しい”“理性”“エネルギー”“戦い”は社会人にのみみられた。

考察

大学生の就職イメージを大学生の視点から明らかにするため、本調査では大学生の自由記述回答をもとに探索的に検討した。なお、大学生独自の就職イメージについて社会人との比較検討から詳細に明らかにするためにも、社会人からも就職イメージの自由記述回答を得た。その結果、学生と社会人には、就職イメージに対する記述数と記述内容ともに、違いがみられた。

まず、記述数については、学生よりも社会の方が、より多く就職イメージについて記述しており、個人単位では“就職すること”に対して多様なイメージを有していることが明らかとなった。就職が将来のものであり想像に頼らざるを得ない学生とは異なり、社会人は日々の体験から就職についての実感を得ている。そのため、社会の方が学生よりも、こうしたイメージに関する多様な側面からなるイメージを具体的に想起しやすいことが記述数に影響を及ぼしたと考えられる。

次に、記述内容については、KJ法による分類の結果、30の意味内容に分類されたが、19の内容が、大学生にも社会人にも共通してみられた。しかし、回答率から大学生において想起されやすいイメージの内容を考慮すると、大学生は社会人と比べて相対的に就職することを自立や社会的な役割の獲得と関連づけていることが伺える。また、社会人において想起されやすいイメージの内容を考慮すると、就職を肯定的に捉えている項目が相対的に多く、これらの項目において、大学生の回答率が2割未満であったことから、社会人は大学生よりも就職することを肯定的に捉えていると考えられる。

さらに、全30項目の意味内容のうち、11項目が大学生のみあるいは社会人のみに確認された項目であったことから、大学生と社会人の抱く就職イメージにおいて異なる側面があるとも考えられる。とくに、社会人から1人も確認されなかった“自分の可能性をせばめること”“社会のシステムの一部に組み込まれてしまうこと”“夢をあきらめること”などのイメージが大学生にのみ確認されたことから、就職することによって将来の自分自身の可能性が制限されるといったイメージは社会人にはイメージされづらい大学生独自のイメージであると考えられる。一方、社会人の4割

Table 1 就職イメージの自由記述回答におけるKJ法による分類と学生・社会人別の回答率

項目	回答率		項目	回答率	
	学生	社会人		学生	社会人
1 お金を稼ぐということ 収入を得る, 金銭を稼ぐ, 給料がもらえる, 経済的安定	58.49%	47.37%	16 やりたいことができないということ 好きなことができない, プライベートがなくなる	9.43%	21.05%
2 時間が縛られるということ 自分の時間がなくなる, 時間の制約, 拘束時間が長い	47.17%	42.11%	17 精神的な安定を得られるもの 精神的安定を得る, 安定感が得られる	7.55%	31.58%
3 自立するということ 自立, 自分で生きていく, 独立する	41.51%	15.79%	18 自分の可能性をせばめること○ 自分の可能性を失う, 活躍の舞台が限定される, その他の成長が伸び悩む	7.55%	0.00%
4 社会的な地位を確立すること 社会的地位が得られる, 社会の一員になる, 社会に参入する	32.08%	15.79%	19 社会的な義務 義務, しなくてはならないこと, 社会でこなさなくてはいけないこと	5.66%	15.79%
5 社会的な責任 責任の増大, 責任が生じる, 責任を伴うこと	30.19%	42.11%	20 社会のシステムの一部に組み込まれてしまうこと○ 社会システムの一部になる, 社会にのまれてしまう	5.66%	0.00%
6 気分的に追いつめられること 余裕がなくなる, 大変, きつい, つらい	28.30%	15.79%	21 当然のこと○ 当たり前のこと, 当然すべきこと	5.66%	0.00%
7 大人への入り口 収入を得る, 金銭を稼ぐ, 給料がもらえる, 経済的安定	22.64%	10.53%	22 夢をあきらめること○ 夢をあきらめることにつながる	3.77%	0.00%
8 生きていくために必要なこと 生きていく手段, 生きるため, 生活を守るため, 生活に必要	20.75%	78.95%	23 家族を養っていく力を身につけること 家族を養っていくことができる, 家族を築く	1.89%	10.53%
9 社会の流れに流されているということ 社会的制約, 流されてしまう, 妥協せざるを得ないことが多そう	18.87%	31.58%	24 面倒なこと○ 面倒	1.89%	0.00%
10 自分を成長させるもの 成長の場, 自分のためになる勉強, 能力の展開, 自分が伸ばせる	18.87%	47.37%	25 家族への恩返し○ 家族への恩返しになる	1.89%	0.00%
11 社会に貢献するということ 社会貢献, 会社のために何かをする, 社会の役に立つ	16.98%	15.79%	26 戦い● 戦い	0.00%	5.26%
12 夢の実現につながること 夢の実現, 夢の延長, 自己実現, やりたいことができる	16.98%	36.84%	27 エネルギー● エネルギー	0.00%	5.26%
13 今後の生き方を確立するもの 生き方を確立, 将来を見据えて生きていくための目算がたつ, 生きがいとなる	11.32%	15.79%	28 理性● 理性	0.00%	5.26%
14 就職することに対して希望を抱いている 楽しみ, 充実感, 期待感がある	11.32%	10.53%	29 健康管理が難しい● 体調不良, 体力低下, 健康に悪い	0.00%	10.53%
15 さまざまなことが経験できる場 さまざまなことを経験する, 社会勉強, いろいろな発見ができる	9.43%	36.84%	30 人との出会い● たくさんの人との出会い, 人との関わりを豊かにする, 色々な仲間ができる	0.00%	42.11%

注1) それぞれの項目における下段は協力者の回答例

注2) 語尾に, ○の付く項目は学生にのみ回答が, ●の付く項目は社会人にのみ回答がみられた項目

以上から確認された“人との出会い”というイメージの他“戦い”“エネルギー”といったイメージが、大学生には1人も確認されなかった。このことから、実際に就職していない大学生は、就職することによって広がる人間関係などの就職イメージの肯定的な側面において、社会人ほど多様でないことが伺える。秋田（1996）は教職受講学生、新任教員、中堅教員における授業イメージの比較を行っているが、教える経験に伴い新任期から数年の間に授業イメージが変容することを明らかにしている。本研究における社会人は、就職してから5年以下で平均年齢は大学生と3歳程度の差であったが、就職して働くという経験を伴っている。こうした経験が、本研究における大学生と社会人の就職イメージの違いを生み出したのだろう。

なお、本研究で明らかにされた就職イメージには、これまでの“働くこと”に対する価値観とは異なり、就職するためには「望ましい」とは捉えられない、また就職することを促進しない、就職に対する否定的なイメージが大学生からも社会人からも抽出された。これは、あえて「望ましき」という方向性が前提とされないイメージを抽出したことが大きな一因であると思われるが、就職して働いた経験がない大学生においてそうしたイメージが多数抽出されたのは興味深い。

また、これまでの“働くこと”に対する価値観の研究では、学生と社会人に同様の測定尺度を用い、因子分析を通して因子構造が異なることが明らかにされてきた（三川，1991；植村，2004）。しかし、特定のイメージが大学生にのみ、あるいは社会人にのみ抽出されたという本調査の結果を勘案すれば、そもそも構造を担う要素自体が大学生と社会人とは異なる可能性が示唆される。このように、就業の有無によってイメージの構成要素が異なるならば、大学生の進路選択を検討する際には、当事者である大学生の視点からイメージを捉えることは非常に重要であろう。本調査の自由記述回答から得られた就職イメージは、大学生の視点から捉えることにより確認できたイメージであり、大学生が日常的に想起可能なイメージであるといえるだろう。

研究2

目的

研究2では、研究1をもとに大学生から得られた就職イメージを項目化することで就職イメージ

尺度を作成し、就職イメージの構造を明らかにすることを目的とする。なお、作成された就職イメージ尺度の信頼性については内部一貫性の観点から検討する。

また、本研究では就職イメージの下位構造を明らかにするが、各構成概念の妥当性についても検討する。研究1で得られた就職イメージは、就職をしていない大学生から得られたイメージであり、進路選択に影響を及ぼす要因であると考えられる。そこで本研究では、古くからキャリア発達を測定するため取り上げられてきた職業レディネス（Crites, 1965；Super, 1957）、および、進路選択課題に対する認知的側面を測定する職業選択課題認知（Beach & Mitchell, 1978）といった要因との関連性を検討する。職業レディネスについては、その高さは進路選択に対する積極的な構えとの関連があること（若林・後藤・鹿内, 1983）、また職業選択課題を重要視するかなど、職業選択課題の捉え方は進路選択に影響を及ぼすことから（下村・堀, 1994）、各要因と就職イメージとの関連を検討し、就職イメージの下位構造の妥当性を明らかにすることを目的とする。

さらに、“働くこと”に対する価値観の研究では、その下位構造について、性差や学年差がしばしば指摘されている（森永, 1994）。そこで、本研究では、性差と学年差についても検討を行うこととした。

方法

調査対象者 調査対象者は首都圏の3大学の文系学部 に在籍する、1年生274名（男性131名、女性143名）、2年生168名（男性88名、女性80名）、3年生280名（男性161名、女性119名）、4年生75名（男性61名、女性14名）、合計797名（男性441名、女性356名）であった。回答に不備のあった者および社会人学生を除いた、1年生257名（男性121名、女性136名）、2年生163名（男性85名、女性78名）、3年生272名（男性155名、女性117名）、4年生69名（男性56名、女性13名）、合計761名（男性417名、女性344名）を分析対象とした。平均年齢は、20.23歳（ $SD=1.24$ ）であった。

調査時期 2004年10月上旬に行われた。

調査内容 ①就職イメージ尺度 研究1で得られた全30項目のうち、社会人にのみ確認された5項目を除いた25項目を就職イメージ尺度項目として用いた。なお、不自然な日本語表現にならない範囲で語尾の統一も行った。

本調査ではそれぞれの項目について、「“就職すること”について、あなたはどのようなイメージを持っていますか。一般的にどう思われているかではなく、あなた自身がどのように思っているかをお答えください。」という教示をもとに、“全くそう思わない”から“大変そう思う”の5件法で回答を求め、順に1点～5点の得点を与えて集計を行った。

②職業レディネス尺度 下村・堀（1994）が若林ら（1983）の職業レディネス尺度をもとに作成した尺度で、「明瞭性」「関与」「非選択性」の3下位尺度15項目からなる。それぞれの項目について、“あてはまらない”から“あてはまる”の5件法で回答を求め、順に1点～5点の得点を与えて集計を行った。なお、「明瞭性」および「関与」の得点が高いほど、「非選択性」の得点が低いほど、職業レディネスが高いことを示す。そのため、就職することを肯定的に捉え、進路選択に対する積極的な構えにつながるようなイメージは（若林ら，1983）、「明瞭性」や「関与」との間に正の相関関係がみられる、および「非選択性」との間に負の相関関係がみられると考えられる。

③職業選択課題認知尺度 下村・堀（1994）がBeach & Mitchell（1978）の「意思決定課題の性質」として提出された8つの下位概念をもとに作成した尺度で、「曖昧性」「重要性」「時間的・金銭的制約」「親近性」の4下位尺度20項目からなる。それぞれの項目について、“あてはまらない”から“あてはまる”の5件法で回答を求め、順に1点～5点の得点を与えて集計を行った。なお、これら4下位尺度の中でもとくに「曖昧性」の得点が低いほど、「重要性」の得点が高いほど進路選択を促進する。そのため、就職することを肯定的に捉え、進路選択を前向きに捉えるようなイメージは（下村・堀，1994）、「曖昧性」と負の相関関係がみられる、および「重要性」と正の相関関係がみられると考えられる。

結果

因子分析と構成した尺度の信頼性 就職イメージ尺度全25項目に対して、探索的因子分析（最尤法・Promax回転）を行った。その結果、固有値の減衰状況（5.44, 4.22, 1.29, 1.23, 1.03, .98, ……）と意味内容、解釈可能性から判断し、4因子解を採用した。どの因子に対しても、.30以上の因子負荷量を持たなかった項目を削除し、繰り返し因子分析を行った結果、3項目が削除され、全部で22項目が採用された。最終的な因子

パターンを項目内容とともにTable 2に示す²。

第I因子は、「社会のシステムの一部に組み込まれてしまうこと」や「気分的に追いつめられること」などの項目からなり、就職することに対して閉塞的で制限的なイメージの内容の項目が主に高い負荷量を示したため、「拘束的イメージ」因子と解釈された。第II因子は、「社会的な責任である」や「社会的な義務である」などの項目からなり、就職を慣習的で則るべき社会の仕組みとして位置付けているイメージの項目が主に高い負荷量を示したため、「規範的イメージ」因子と解釈された。第III因子は、「夢の実現につながることである」や「さまざまなことが経験できる場である」などの項目からなり、就職に対して自己成長的で未来志向的なイメージの内容の項目が高い負荷量を示したため、「希望的イメージ」因子と解釈された。第IV因子は、「お金を稼ぐということである」や「自立するということである」などの項目からなり、就職に対して経済的な安定や自立といったイメージの内容の項目が高い負荷量を示したため、「自立的イメージ」因子と解釈された。各因子に高い負荷量を示した項目により、各下位尺度を構成した。その結果、「拘束的イメージ」尺度は8項目、「規範的イメージ」尺度は6項目、「希望的イメージ」尺度は4項目、「自立的イメージ」尺度は4項目から構成された。

次に、本尺度の信頼性を検討するため内部一貫性の観点から、4つの下位尺度についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、「拘束的イメージ」は.82、「規範的イメージ」は.76、「希望的イメージ」は.76、「自立的イメージ」は.70であった。

下位尺度の妥当性 本尺度の下位概念の妥当性を検討するため、尺度の因子に含まれる項目の得点を合計し、就職イメージ尺度の各下位尺度得点と職業レディネス尺度の「明瞭性」「関与」「非選択性」の3つの下位尺度得点および職業選択課題認知尺度の「曖昧性」「重要性」「時間的・金銭的制約」「親近性」の4つの下位尺度得点との相関係数を算出した（Table 3）。なお、職業レディネス尺度の3下位尺度および職業選択課題認知尺度の4下位尺度の信頼性係数は、 $\alpha = .70 \sim .82$, $\alpha = .68 \sim .78$ と一定水準の値が得られたため、そのまま用いることとした。

まず、職業レディネスとの関係を以下に示す。「拘束的イメージ」は「明瞭性」および「関与」との間に有意な負の相関が、「非選択性」との間に有意な正の相関が示された。一方、「規範的イメージ」は「関与」との間に有意な正の相関が示

杉本：大学生の就職に対するイメージの構造

Table 2 就職イメージ尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV
第Ⅰ因子 拘束的イメージ				
12 社会のシステムの一部に組み込まれてしまうことである	.62	.20	-.02	-.14
5 気分的に追いつめられることである	.62	-.06	-.03	.15
11 夢をあきらめることである	.61	.04	.00	-.22
22 社会の流れに流されているということである	.60	.14	-.03	-.10
20 やりたいことができないということである	.59	.03	-.11	.06
3 時間が縛られるということである	.59	-.15	.12	.26
24 自分の可能性をせばめることである	.59	.01	.22	-.21
15 面倒なことである	.56	-.11	-.28	.29
第Ⅱ因子 規範的イメージ				
16 社会的な責任である	-.01	.80	-.14	.05
10 社会的な義務である	.02	.71	-.14	.04
14 社会的な地位を確立することである	.07	.48	.05	.14
13 大人への入り口である	.14	.42	.16	.05
23 社会に貢献するということである	.08	.42	.33	-.02
4 当然のことである	-.19	.40	.01	.29
第Ⅲ因子 希望的イメージ				
9 夢の実現につながることである	.00	-.09	.71	.02
19 さまざまなことが経験できる場である	.07	.00	.70	.09
25 自分を成長させるものである	-.02	-.01	.63	.15
7 就職することに対して希望を抱いている	-.13	.05	.61	-.09
第Ⅳ因子 自立的イメージ				
8 お金を稼ぐということである	.02	.11	-.08	.56
2 自立するということである	.02	.08	.23	.48
18 生きていくために必要なことである	-.12	.23	.09	.45
6 今後の生き方を確立するものである	.01	.12	.29	.38
因子間相関				
II	.14			
III	-.50	.37		
IV	.09	.45	.35	

Table 3 就職イメージ尺度と職業レディネス尺度・職業選択課題認知尺度との相関

	職業レディネス			職業選択課題認知			
	明瞭性	関与	非選択性	曖昧性	重要性	制約	親近性
拘束的イメージ	-.30 ***	-.30 ***	.29 ***	.53 ***	.09 *	.23 ***	.04 n.s.
規範的イメージ	.05 n.s.	.21 ***	.01 n.s.	.16 ***	.37 ***	.29 ***	.03 n.s.
希望的イメージ	.45 ***	.52 ***	-.27 ***	-.32 ***	.22 ***	.09 *	-.10 **
自立的イメージ	.04 n.s.	.21 ***	-.20 ***	.09 *	.46 ***	.30 ***	.20 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

され、「希望的イメージ」は「明瞭性」および「関与」との間に有意な正の相関、「非選択性」との間に有意な負の相関が示された。また、「自立的イメージ」は、「関与」との間に有意な正の相関、「非選択性」との間に有意な負の相関が示された。

次に、職業課題認知尺度の各下位尺度との関連を以下に示す。「拘束的イメージ」、および「規範的イメージ」は、「曖昧性」、「重要性」および「時間的・金銭的制約」との間に有意な正の相関が示された。一方、「希望的イメージ」は、「曖昧性」、「親近性」との間に有意な負の相関、「重要性」、「時間的・金銭的制約」との間に有意な正の相関

が示された。また、「自立的イメージ」は職業選択課題認知尺度の全下位尺度との間に有意な正の相関が示された。

性差と学年差の検討 就職イメージの性差と学年差を検討するために、就職イメージ尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、性（男性・女性）×学年（1年生・2年生・3年生・4年生）を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果、有意な交互作用はみられず、「規範的イメージ」($F(1, 753) = 5.67, p < .05$)、「希望的イメージ」($F(1, 753) = 6.46, p < .05$)、「自立的イメージ」($F(1, 753) = 4.10, p < .05$)において性の主効果が、

Table 4 性別×学年ごとの就職イメージ尺度における平均値と2要因分散分析の結果

	男性				女性				F値 多重比較 (Tukey HSD法)		
	1年 n=121	2年 n=85	3年 n=155	4年 n=56	1年 n=136	2年 n=78	3年 n=117	4年 n=13	主効果		交互作用
									性	学年	
拘束的イメージ	20.64 (5.22)	24.05 (5.52)	22.80 (5.12)	23.11 (6.40)	21.18 (4.68)	23.15 (5.49)	23.91 (5.52)	22.77 (4.80)	0.04	12.37 *** 2年, 3年>1年	1.28
規範的イメージ	20.03 (5.13)	21.07 (4.82)	21.30 (4.57)	21.66 (5.12)	21.87 (3.94)	22.22 (3.79)	22.09 (3.65)	22.00 (6.07)	5.67 * 女性>男性	1.55	0.75
希望的イメージ	16.04 (2.96)	14.79 (2.96)	15.39 (3.04)	15.98 (3.31)	16.79 (2.34)	15.62 (3.15)	15.65 (2.84)	17.00 (1.73)	6.46 * 女性>男性	7.78 *** 1年>2年, 3年	0.53
自立的イメージ	16.41 (2.88)	16.85 (2.48)	16.63 (2.84)	16.96 (3.06)	17.24 (2.16)	17.29 (2.08)	17.53 (1.90)	16.77 (3.49)	4.10 * 女性>男性	0.56	0.77

() 内は標準偏差

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

「拘束的イメージ」($F(3, 753) = 12.37, p<.001$) と「希望的イメージ」($F(3, 753) = 7.78, p<.001$) において学年の主効果がみられた (Table 4)。

そこで, Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ, 「拘束的イメージ」では, 2, 3年生が1年生よりも有意に得点が高かった。「規範的イメージ」では, 女性が男性よりも有意に得点が高かった。「希望的イメージ」では, 女性が男性よりも, 1年生が2, 3年生よりも有意に得点が高かった。「自立的イメージ」では, 女性が男性より有意に得点が高かった。

考察

就職イメージ尺度の作成 本研究では, 大学生の就職イメージに対する自由記述回答をもとに就職イメージ尺度を作成した。因子分析の結果, 本尺度は「拘束的イメージ」, 「規範的イメージ」, 「希望的イメージ」, 「自立的イメージ」の4つの下位尺度から構成された。なお, 各下位尺度の α 係数の値が.70～.82となり, 第IV因子「自立的イメージ」の値は.70と高いとはいえないが, それぞれの下位尺度に対して, ある程度の内部一貫性が認められたといえる。これらの結果から, 本研究で作成された就職イメージ尺度には十分な信頼性が備わっていると結論づけることができるであろう。

次に, それぞれの下位尺度の妥当性について検討すべく, 就職イメージの各下位尺度得点と職業レディネスおよび職業選択課題認知尺度の各下位尺度得点との相関係数を算出した。その結果, 「拘束的イメージ」が高いほど, 就きたい職業は不明確であり職業選択に関心がなく自ら選択していく構えをもたないなど職業レディネスが全般的に低く, 職業選択課題を曖昧で時間的・金銭的にも制約があると捉えていることが示された。ま

た, 「規範的イメージ」が高いほど, 職業選択に関心があり, 職業選択課題を曖昧で時間的・金銭的にも制約があるが重要であると捉えていることが示された。「希望的イメージ」が高いほど, 就きたい職業が明確であり職業選択に関心があり自ら選択していく構えをもつなど職業レディネスが全般的に高く, 職業選択課題を曖昧でなくなじみのない課題ではあるが, 重要だと捉えていることが示された。「自立的イメージ」が高いほど, 職業選択に関心があり自ら選択していく構えをもち, 職業選択課題を時間的・金銭的に制約があるが, なじみのある重要な課題であると捉えていることが示された。

進路選択と職業レディネス (若林ら, 1983) や職業選択課題認知 (下村・堀, 1994) との関連性を勘案すれば, 「拘束的イメージ」が高い者ほど進路選択に消極的な姿勢をもち, 「規範的イメージ」「希望的イメージ」「自立的イメージ」が高い者ほど進路選択に積極的な姿勢をもつ可能性が示唆される。なお, 働くことや職業を忌避する職業忌避的傾向が強い者ほど, 仕事に就くことに対して, 束縛され単調で個性的な生き方を損なうなど否定的なイメージを抱くとされる (古市, 1995)。本研究において, 「拘束的イメージ」と進路選択に対する消極的な姿勢との関連性が明らかにされたことを考慮すれば, 職業忌避的な傾向が強い者ほど「拘束的イメージ」を抱くと考えられる。その一方で, 「希望的イメージ」については「拘束的イメージ」と負の相関を示し, 進路選択への積極的な姿勢と関連が強かったことから, 職業志向的な傾向が強い者ほど「希望的イメージ」を抱くだろう。

また, 「規範的イメージ」と「自立的イメージ」は比較的高い正の相関を示した。しかし, 「自立的イメージ」は, 職業レディネスの「非選択性」

との間に負の相関、職業選択課題認知の「親近性」との間に正の相関が示されたが、「規範的イメージ」は、両者ともにほぼ無相関であった。下村・堀（1994）によれば、職業レディネスの「非選択性」が高いほど、職業選択課題の「親近性」が低いことが示されている。すなわち、職業を選択することをあまり重視していないほど、職業選択をなじみのない選択と捉えることを示している。「自立的イメージ」が高いほど職業レディネスの「非選択性」が低いという関連がみられたのは、項目内容から「自立的イメージ」が経済的自立の要素を含んでおり、どの職業を選択するかによって経済的な側面が大きく異なるということが影響していると思われる。つまり、「自立的イメージ」が低い者ほど、職業を選択することを重視せず、職業選択をなじみのない選択として捉えるのかもしれない。一方、「規範的イメージ」は職業の非選択性との関連はないため、職業選択がなじみのある選択かは考慮される必要がない。このように、「規範的イメージ」と「自立的イメージ」は職業レディネスの「非選択性」や職業選択課題認知の「親近性」という側面から弁別できることが示唆された。

以上、就職イメージ尺度の各下位尺度が職業レディネス尺度および職業課題認知尺度の各下位尺度との間に異なる関連性を有することから、就職イメージ尺度の各下位尺度の妥当性および弁別性が確認された。

ところで、本研究ではこれまでの“働くこと”の価値観に関する尺度では見受けられなかった「拘束的イメージ」という独自の因子が抽出された。その理由として、価値観という構成概念自体が「望ましさ」という方向性を前提としていることが関連していると思われる。本研究では、そうした「望ましさ」を仮定しないイメージに焦点をあてたが、その結果、現代大学生における“働くこと”に関連するイメージとして注目に値する一側面を抽出することができたと思われる。

性差と学年差の検討 就職イメージ尺度の各下位尺度の性差と学年差を検討するために、就職イメージ尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、性（男性・女性）×学年（1年生・2年生・3年生・4年生）を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果、それぞれの下位尺度に性や学年による得点の差が見受けられた。

まず、性差について、「規範的イメージ」「希望的イメージ」「自立的イメージ」において、女性の方が男性よりも下位尺度得点が高いという結果

になった。若林・和田・斎藤（1987）において、女性の方が男性より職業レディネスが高いという結果が確認されているように、大学生において進路選択に対する意識は女性の方が高いと考えられる。本研究においても「規範的イメージ」「希望的イメージ」「自立的イメージ」という進路選択を促進すると考えられるイメージにおいて同様の結果がみられたのは、こうした進路選択に対する意識の高さが影響しているかもしれない。

次に学年差については、「拘束的イメージ」では1年生よりも2、3年生の方が、「希望的イメージ」では2、3年生より1年生の方がより下位尺度得点が高いという結果となった。都筑（2007）において、3年生は進路選択活動の実際的な開始段階であることが指摘されているように、開始段階までに時間的な余裕がある1年生よりも、2、3年生の方が就職を現実的に捉え時間的な切迫感を感じているだろう。そのため、本研究で確認されたように、就職に対して1年生よりも2、3年生の方が拘束的なイメージを有していたと考えられる。ただし、就職イメージと時間的な切迫感との関連についての検討は不十分であり、今後さらなる検討が必要であると思われる。

まとめと今後の課題

本研究では、進路選択を行う大学生の視点を重視した就職イメージ尺度を作成し、その構造と下位概念の妥当性を明らかにすることを目的とした。就職に対するイメージについての自由記述回答を検討した結果、大学生は社会人よりも多様な就職イメージを有しておらず、相対的に就職することを自立や社会的な役割の獲得と関連づけており、就職することによって将来の自分自身の可能性が制限されると捉えていることが明らかとなった。また、本研究では大学生の自由記述回答をもとに就職イメージ尺度が構成されたが、「規範的イメージ」「希望的イメージ」「自立的イメージ」と、これまでの“働くこと”の価値観やイメージに関する尺度では見受けられなかった「拘束的イメージ」という新たな側面を加えた4つの下位尺度からなる尺度が作成され、おおむね満足できる信頼性と妥当性が確認された。ただし、本研究では、大学生の視点から就職イメージについて検討するにあたり、就職イメージについての自由記述回答をもとに社会人との比較を検討するにとどまった。大学生の就職イメージの特徴をより明確に理解するためにも、尺度を通して社会人との比

較検討をするなどより詳細な検討が求められる。

今後は、就職イメージの発達・形成過程についての検討が必要だろう。本研究では社会人よりも学生の方が就職イメージの否定的な側面を有していることが明らかにされたが、そもそも就職経験のない学生がなぜこうしたイメージを形成するのかについては検討の余地がある。浦上（1992）が指摘するように、これまで“働くこと”の価値観やイメージの発達・形成過程に関する実証研究は乏しいが、近年、職場体験やインターンシップへの取り組みが盛んになり、そうした直接的な経験による影響が検討されている。これらの研究知見をもとに価値観やイメージの発達・形成過程を明らかにしていくことが求められる。

また、就職イメージが大学生の進路選択過程に及ぼす影響についても検討する必要があるだろう。たとえば、進路選択に取り組まないあるいは取り組むことができない学生は、その状態が継続すれば、必然的に就職しない、あるいはできないこととなる。そこで、就職イメージと進路選択に対する具体的な行動との関連を検討することにより、進路選択に回避的あるいは消極的な学生の心理過程を明らかにできるものと思われる。

こうした学生の心理過程を明らかにできれば、彼らに対してどのような時期にどのような支援を行うべきか焦点を絞った支援ができるだろう。現在、大学でのキャリア・ガイダンスが義務化され、学生一人一人に対する継続的かつ積極的な支援が求められている。今後、これらの研究知見を積み重ねることにより、進路選択が困難な学生に対する有効な支援策に貢献できると思われる。

注 記

¹ 大学卒業者の就職率については、文部科学省「学校基本調査」（各年5月1日現在）の各年3月卒業生の就職者総数から算出した。

² 性や学年によって就職イメージの下位構造が異なることも予想されたため、性別・学年別に因子分析を行った。なお、学年別の分析には因子分析に十分な人数を確保するため、低学年（1・2年生）と高学年（3・4年生）に分類し検討した。

その結果、性別、学年別に項目の違いが若干見受けられたものの、それぞれ全体で因子分析を行った結果と同様、「拘束的イメージ」「規範的イメージ」「希望的イメージ」「自立的イメージ」と解釈可能な4因子が抽出された。

なお、項目の違いとしては、男性は項目23の「社

会に貢献するということである」が規範的イメージと希望的イメージに.35以上の負荷を示し、女性は項目4「当然のことである」、項目6「今後の生き方を確立するものである」、項目13「大人への入口である」、項目24「自分の可能性をせばめることである」の負荷量が.35以下の負荷量を示すという結果となった。一方、低学年では項目4「当然のことである」が規範的イメージと自立的イメージに.35以上の負荷を示し、高学年では項目23「社会に貢献するということである」が規範的イメージと希望的イメージに.35以上の負荷を示した。

参考文献

- 秋田喜代美 1996 教える経験に伴う授業イメージの変容—比喩生成課題による検討— 教育心理学研究, 44, 176-186.
- Beach, L. R., & Mitchell, T. R. 1978 A contingency model for the selection of decision strategies. *Academy of Management Review*, 13, 439-449.
- Brown, D., & Crace, R. K. 1996 Values in life role choices and outcomes: A conceptual model. *The Career Development Quarterly*, 44, 211-223.
- Crites, J. O. 1965 Measurement of vocational maturity in adolescence: I. attitude test of the vocational development inventory. *Psychological Monographs: General and Applied*, 79, 1-34.
- 江口圭一・戸梶重紀彦 2009 労働価値観測定尺度（短縮版）の開発 実験社会心理学研究, 49, 84-92.
- Elbaz, F. 1981 The teacher's "practical knowledge": Report of a case study. *Curriculum Inquiry*, 11, 43-69.
- 古市裕一 1995 青年の職業忌避的傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- 岩熊史朗・横田 仁 1991 セルフ・イメージの発達の变化—WAI技法に対する反応パターンの分析— 社会心理学研究, 6, 155-164.
- 柿原長広 1997 職業高校生の勤労観に関する基盤的研究（1） 進路指導研究, 18, 39-46.
- 三川俊樹 1991 日本の青年における職業（労働）価値観 カウンセリング研究, 24, 27-36.
- 三島知剛 2007 教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容 日本教育工学会論文誌, 31, 107-114.
- 三宅義和・遠藤竜馬 2005 第7章進路選択における両親の影響—非選抜型大学の保護者の進路意識調査を通じて— 居神 浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑 秀和 大卒フリーター問題を考える ミネルヴァ書房 Pp. 175-211.

- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf〉(2011年10月23日)
- 森永康子 1994 男女大学生の仕事に関する価値観 社会心理学研究, 9, 97-104.
- 森永康子 1997 大卒・短大卒女性の仕事に関する価値観 教育心理学研究, 45, 166-172.
- 岡本英雄 1972 職業イメージと職業選択 職業研究所研究紀要, 3, 73-87.
- Rokeach, M. 1973 *The nature of human values*. New York: The Free Press.
- 下村英雄・堀 洋道 1994 大学生の職業選択における情報収集行動の検討 筑波大学心理学研究, 16, 209-220.
- Super, D. E. 1957 *The psychology of careers*. New York: Haper & Row Publishers.
- Super, D. E. 1970 *Work values inventory*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Super, D. E., & Nevill, D. D. 1986 *The values scale*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 高橋美保 2005 「働くこと」の意識についての研究の流れと今後の展望—日本人の職業観を求めて— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 45, 149-157.
- 都筑 学 2007 大学生の進路選択と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版.
- 植村善太郎 2004 就労観の探索と常勤経験有無による就労観の差異 日本進路指導学会第26回研究大会論文集, 72-73.
- 浦上昌則 1992 価値観についての進路発達の研究 進路指導研究, 13, 15-21.
- 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 1983 職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業観との関連— 名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科, 30, 63-98.
- 若林 満・和田 実・斎藤和志 1987 教育学部新入生の進路決定過程に関する4年間の追跡的研究 (I) 名古屋大学教育学部紀要：教育心理学科, 34, 303-316.